最近思ったこと

帯広市医師会
北斗病院
宮本　顕彦

愛知県から北海道に移って10年経過しました。当初はいろいろと気候・風土の違いを興味深く感じました。

ただ、季節外れですが、雪についてはずっと思うことがあります。それは、屋根付き駐車場が非常に少ないことです。特に病院では、同伴者がいない患者は、帰宅時までに雪が積もっていたら体調不良の状態で除雪しなければなりません。体調不良時に運転するべきではないことは言うまでもなく、タクシー等を使うべきと思いますが、全員がそうする訳ではありません。また、凍結路面の歩行時の転倒について、何年か前に病院の敷地内で転倒して骨折したというニュースがあったような記憶があります。降雪地域の人は慣れているといっても、高齢者は滑ったときの対応能力が低下しているでしょうし、転倒して大腿骨頚部を骨折してしまうと寝たきりになる可能性もあります。屋根やロードヒーティングなどの設備は当然コスト面からは難しいと思いますが、特に病院では、敷地内の凍結路面での転倒を自己責任で済ませてしまうのはいかがなものかという気がします。

また、今年の夏は暑く、熱中症がニュースでも頻繁に出ています。北海道は自宅に冷房がないのは当然なのでしょうが、2010年だったか、非常に暑かったこともありました。今後、北海道でも酷暑になる頻度が多くなりそうです。本州でも、昔は学校の教室にクーラーなどないのが普通で、徐々に設置されてきていますが、それでもまだ設置率は低いです。今年は実際に児童が熱中症で亡くなってしまったニュースがあり、今まで冷房なしでも大丈夫だった、自分たちは冷房なしでも我慢してきた、冷房を設置すると暑さに対する耐性が育まれなくなる等の、古い考えに対する反対意見が強くなってきたと思います。児童が亡くなってしまった自治体では早急に設置することが決まったようですが、実際に犠牲者が出てからの対応となったことが残念です。

日本では、実際に被害が出てからの対応になることが多いと思います。被害が出ても対策がなされないことも多いですが。逆説の日本史などで得た知識ですが、日本では言霊によって、言ったことが現実化するという考えがあるため、危機管理上の問題である、とのこと。最近、これまでの常識が通用しないことや、いわゆる想定外の事態が多くなってきたように思いますので、根拠のない常識や前例主義などに囚われない努力が必要と思います。

薪ストーブは地球温暖化を救えるか

札幌市医師会
勤医協札幌西区病院
田村　正吾

昨年、27年間住み慣れたわが家をリフォームし、長男家族と同居した。その際、かつて家族に反対されて断念した薪ストーブをなんとか設置することができた。

後付けながら、家族を説得する理由を考えてみた。化石燃料である石油やガスは、数万年かけて炭素を地中に固定したものだが、産業革命以降、爆発的な炭素エネルギーの消費は地球温暖化の元凶となっている。一方、薪や木質ペレットなどのバイオマス原料は、空気中のCO_2を吸収して形成された木材を燃やすことでCO_2を放出し、それを植物が再吸収するという循環を行っている。これを炭素ニュートラル（CO_2が増えない）という。つまり、薪は唯一再生可能な資源なのである。昔、薪ストーブで薪を燃やせば、煤や臭いが出て周囲の環境を悪化させると思われていたが、近年薪ストーブの普及が進んだ欧米では、2000年以降、車の排気ガス規制と同じように、薪ストーブからの煙や排出ガスを厳しく法的に規制している。ただ燃やせるだけの薪ストーブは淘汰され、排出ガスに含まれるCO_2やタール等を抑制するストーブが開発された。現在、触媒を使って完全燃焼させる触媒方式や未燃焼ガスに空気を送り２次３次と燃焼を促進するクリーンバーン方式に代表される薪ストーブが主流となっている。燃焼効率を上げることで、煙がほとんど出ないストーブなのである。これは地球温暖化を救う一助となると考えた。

もっとも、日本では薪ストーブの環境への法的規制はほとんどないとのことである。そんな訳で、薪割りや火付けなど多少の手間と初期投資（煙突とストーブで100万円ほど）がかかるものの、電気も使わず、チョットした料理（ピザや焼き芋等）もこなせ、環境へも配慮された薪ストーブで暖かい遠赤外線効果と美しい焔を見ながら、家族の会話も弾み、冬が越せることに感謝である。